

## 序

『私がしたたかな人間でなかったら生きてはいなかったろう。優しくなれなければ生きていくかあるまい。』

これは最近ちょっと有名になった科白であるが、アメリカ生れの作家レイモンド・チャンドラーが1958年に出版した小説の中で、主人公に言わせた言葉である。

自然科学方面の仕事をしている人間は、宇宙は根元的な、あるひとつの原理から全てが説明できる筈だという信仰を抱いている。そして、その考えを人事万般に及ぼそうとする。

「したたかさ」と「優しさ」と人生において、いずれが上位概念か。両方とも同じように大事なのだというのは分析不十分なためではないのか、ということである。しかし、そう明快に割り切るべきものかどうか疑問にも思える。人の世にはいくつかの原則が共存し、それらのバランスを取るセンスこそ最も大切なことではあるまいか。

企業にもそういう問題がある。企業は利益を上げ、株主や従業員に報いるのが目的であろう。しかし、そのみであろうか。企業は一方で社会に奉仕し、それによって評価を受けるということも、その存在理由のひとつではなかろうか。それについて、社会に奉仕するのは、企業イメージを上げ、従業員のモラルを高め、所詮は利益を得るための手段ではないかという見方をする人もあるかも知れない。

しかし、そう単純に割り切るのは危険でもあり、実情に則していない。企業は利益を得なければ生きてはおれない。しかし、社会から評価されなければ生きていくかがないのである。

それでは企業の中の研究所はどうだろうか。これからの企業は、その存立を研究開発力に大きく依存するであろうと言われている。とすれば、企業貢献度こそ研究所の存在理由の説明になる。しかし、ただそれだけであろうか。

研究所には大勢の研究者が働いている。その人達ひとりひとりが、自らの生きているあかしを持っていないければならない。すなわち、研究所は企業に貢献できなければ生きてはおれない。しかし、新しい発明発見の喜びを感じる事ができなければ、生きていくかがない。その両方の、あるバランスの中で研究所は生きているのである。

1981年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 烏田 専 右